

## 雑報

雑誌名	龍南會雑誌
巻	1 3
ページ	4 1 - 4 4
発行年	1893-01-31
その他の言語のタイトル	雑報
URL	<a href="http://hdl.handle.net/2298/4013">http://hdl.handle.net/2298/4013</a>

## ○奉迎

第六師團長北白川官殿下には去十二月廿九日を以て門司御出發、二番瀛車にて御着熊遊ばされたり、右に付き師團は勿論、官衙吏員市内有志官私學生の奉迎者歡呼雲集し春日停車場より偕行社に至るの間寸地を餘さざりし我校に於ても在熊生徒百廿餘名秋山助教の引率にて御道筋なる市内細工町に整列し恭しく殿下の御一行を迎へ奉りたり、憾むらくは時恰も冬期休業に屬し學校奉迎せる能はざりしこと、

## ○職員の異動

本校衛生醫、池田方策氏並びに体操助手重田榮太郎氏は過日願に依り職務を免せられ池田氏の後任として柿田末四郎氏と其職を囑托されたり、

## ○徽章の改定

本校制帽の徽章は從來本科豫科補充科により夫れぐゞ白線幾數を異にせしが今回改めて各科通じて三條を用ゆることとせむをたり、

## ○歲末の土曜會

は忘年會を兼ね十二月十七日午後六時より瑞邦館に開かれ燭光四隅に輝き滿堂晝を欺き會者三百五十名櫻井大瀨大幸の諸教授本田舍監之に臨まれ實に近來の盛會揭なりき」近日吾校生徒の風儀に關する風評稍新紙に上り各人不安の折柄本會開會の廣告一たび示場に現はるゝや定めし目覺しき演説を見んとは何人も先づ豫期する所なりき果せる哉滿腔の感慨と溢れて和木君の譬喩的諷誡となり堀君の悲憤的警醒となり吉田君の慷慨的辨疏となり四百の聴衆をして覺す齒をを切り腕を扼し遂に泣然として悲憤の涙を飲よしむるに至れり和木貞君は「はなよ」學校と云へる理想的學校を形成し之を近時の諸校に對照し一々校弊のある所を指摘し毫厘も假す所なく其裏面の真相を說破するに及んでは恰かも針頭を以て局部を刺すの想ありき堀貞君は和木君に續て校風の心要を説き例を東西古今又取り侃々諤々論去論來其局終に吾校風の缺乏を慨す堀氏壇を下るや大幸教授は嘗て行軍の際實見せし「神瀨の洞穴に就て」演説あり一々實驗を以て所説を証明し諄々懇々數百言堀君の演説を聞て後に教授の演説に接する恰かも怒濤涌洶の大洋を過て一碧万頃の内海に入るの想あり彼は則ち壯此は則ち快、大幸教授に次

て櫻井教授は今回制帽の白線を各科共三條になすことに就て説話あり其要旨は從來の如く本科豫科補充科夫を／＼徽號を異にするときは或は其間に多少の感情を異にするを恐るゝ又從來の儘にては他校生との見紛ふの憂なきにあらず且つ世間に對する上よりするも本校全体を通して一定の徽章を用ゆる方可なるべしと云ふにありき教授の演説終るや羅針と再び轉じて崩濤百尺の大洋に向へり突然演壇に現はるゝものありこれ則ち吉田久太郎氏なりき氏は劈頭一喝「大浦三郎君の冤を雪く」と叫び大浦氏が其始め一種の負傷より惹いて淋巴腺炎となり爲めに一方ならざる醜聞を流すに至りたるの顛末を序述し慷慨激昂其要處に及んでは燒天の氣抑へんとして益々揚り言激し色厲玄毛髮堅立し目眦破裂し聽者をして拳を擧げて席を打たしむる再三、かくの如くにきて黑白全く判然し大浦君の風評は全く無實なること一般に信せられたり嗚呼吉田君の大浦氏に盡すかくの如きは實に非常の美譽たゞ世の輕薄男子願くは吾が吉田君の交道を學べ吾人は双手を擧げて之を賛せざるを得ざる也」續て古森幹枝君は九州青年の九州青年たる所以は一よ其元氣に在て存すと述べ滔々數百言、言々皆誠意より溢る、これより菓子配り雜話頃刻、時に場の一方嘈々たる撥絃の聲を聞く、これ即ち當夜餘興の爲め招きたる肥後第一流の盲目法師「靜の一」が肥後琵琶を彈するなりき我等已に屢薩摩琵琶を聽く唯肥後琵琶に至ては今回を始めとす四百の聽衆齊しく耳を欬て聲を靜めて其發音を待ちぬ、何事か八百の鼓膜に落る、彼れは急撥一番……………説き出す所は即ち八島軍記なりき調節自ら薩摩琵琶に同じからず忽にして調高く忽にして曲低く疾風細雨交々至り大珠小珠玉盤に落つ夜愈深くして絃聲愈高く四隣寂閑遙かに白水清流の響に應ず彈じ去り彈じ來りて適々繼信忠死の段に至る四絃嘈々秋風の木葉を散すが如く哀猿の夜悲鳴するに似たり、滿室黯然、前に意氣激昂、毛髮を逆にし、目眦を裂きし四百の壯士悉く頭を垂れて暗涙を飲む時に漏聲十二を報ず絃聲乃ち止んで衆皆退散せし此日や始めには慷慨淋漓たる警論起りて活々たる元氣を喚起し後には則ち壯快美妙なる琵琶を聽て胸

臆の快を買ふ夫を一張一弛と成業の訣なり若しかくの如くにして止まずんば我會の前途豈多望ならずや區々たる世評何ぞ關するを用ゐん、

○傳ふる者あり　曰く第五高等中學校或は廢せらるゝに至らんと吾人は其の何の謂たるを知らざりき頃日に至り復傳ふる者あり曰く廢校の議成らずと巷説紛々、昨是今非、世間一切の事は是れ固より吾人の關する所にあらざるなり、

○年頭比土曜會　今月二十一日午後一時半之を瑞邦館に開く會するもれ百有餘名當番委員中山文次郎君は開會の辭を、櫻井教授は潮汐に就て、足達駒之介君は大人豪傑に就て、野口彌三君は道德脩養の必要を論じ併せて本校生徒の責任に及び吉田久太郎君と英語を以て盜難被害者れ爲め義捐をなさんことを勸告し皆熱心に其所説を辯じ出せり吾人は我龍南會演説部の歳と共に正に一歩を進め得たるを認む尙ほ有馬教授は精神的教育に就て演説あるべき筈なりしも時已に五時を過ぎたるを以て之を他日に期して本日之會を閉づ、

○盜あり　我習學寮に入る奪ふ所ろは四十餘金と時計一箇而えて吾人が胸中の大倉庫に入り恣まゝに如山れ珠寶を奪ひ去るの術を知らず憐れむべき哉。因ふ云ふ右に付野口彌三吉田久太郎の両氏は義捐金を募り其困難者に贈らんとて専ら盡力中なり、

○本校一覽　成る印刷頗ぶる鮮明卷末には卒業諸氏の方向を記載せり本校れ現狀を詳にし併せて他日の追憶に供すべきなり、

○壯哉　毎朝風鋒如劍の裡にありて勇ましき竹刀の聲を聞く蓋し擊劍部諸氏の寒稽古あり壯士益々壯、

○炊事委員　吾人が自立自營の一大手段たる我校特有の自炊制度は歲月を重ねるに従ひ着々効果を奏しつつあることなるが今般例規に依り委員の改選を行ひたり、吾人は茲に謹んで舊委員諸君が幹旋の勞を謝し併せて切に新委員諸君の奮勵を願はざるを得ざるなり、尙ほ新委員の

重なるものは左の諸氏とす、

委員長兼會計掛長

淺川雄太郎君

購入掛長

池田 義重君

保管掛長

横山 茂橘君

○霹靂一聲

揚示あり曰く嘉納學校長文部省參事官に轉任之中川第四高等中學校長其後任  
とならんと吾人は茫然自失未だ其眞偽を詳らかにせざる程なり果して信なりとせば是れ何等の  
一大不幸ぞ吾人は全力を盡して其留任を請せざるを得ず次號の詳報を待て、

○再び奉迎

去月御來着あらせられし北白川宮殿下の御息所殿下にて本月二十八日門司  
發一番汽車にて當日午後二時春日停車場に御來着夫れより直ち御館僧行社に入らせられたり  
右に就き本校生徒四百名は打揃ひ春日停車場綠門下に整列きて奉迎せり、

○原稿

今回も亦投寄の原稿を悉く掲載を得ず又中には全文を寄せられて割載したるもの  
あり紙面に限るを止むことを得ず、

